



聖フランシスコ・サベリオ

## ギルロイ枢機卿御來校

六月十日午後三時五十分、フランス・サベリオ来朝四百年記念祭の日にローマ教皇より派遣されたギルロイ枢機卿とその随員の一部六名が御來校された。三時五十分ギルロイ卿は言(ハ)イヤーでM.P.のジープに守られながら本校事務館前に着かれ、生徒は皆道に並んでお迎えし、やがて自動車より降りられ、御は校長先生、ヘルベツク先生、シュトルテ先生と挨拶された後、ヘルベツク先生と校長先生とに指中を交えられ、それから、事務館の階段を上って行かれた。やがて会議室に入られ、中からは愉快な話も聞かれ、面に出した横置はすぐ顔合の体形に並び、枢機卿の出で来られるのを待った。やがてゆつくりと入口より姿を出され、御は、校長先生の講話の辞の後、校に上られて、御等に語る様にゆつくりと英語で話された。

「私はここにきて、こんなに立派な建物の集まりを見て、載いた事は、これもまた絶えませんが、

しましように「わー、すごいな、どうしてだろう」とあちこちで半信半疑で且喜びの声をしている。シュトルテ先生が「これはカトリックスクールに司教様の来られた時は習慣として休みを早く華になつてゐるのです」と説明された。これさういふ出陣の景因はとけて皆「休み、休み」と大喜びだ。

ギルロイ枢機卿は、前に並んでゐる生徒に「Can you speak English? How old are you?」とか、種々質問され、一口の綴帳に「Yes.」とこゝ頻でいわれた。

その後、お休みを戴いて、御礼として校敷を合禮して四時半ギルロイ卿以下六名の方とサヨナラを交し合つてお別れした。

聖なる右手

## 聖なる右手

五月廿七日、聖フランシスコ・ザヴェリオの右手は日本に到着し、その日はちょうど御昇天の大祝日で修道院の方が羽田へあの石を運ぶに迎へて行かれた。聖フランシスコは本校を監督するイエズス会の最初の会員の一人であつたから、本校と特別な関係があるのです。サヴェリオの右手について、聖人と同様のパスコ人修道院にいらつしめるエセサベレナ先生に聞く。

聖フランシスコは支那の上川屋で亡くされてその版畫をされて後インドのゴアへ運ばれた。その時彼の体に変化が起つた。一八一四年ローマでその版畫を引き取らうとしたがゴアで許さなかつたので、その右手だけを持ち

## 四百年ぶりに

五月二十九日長崎から始つた聖フランシスコ・ザヴェリオの巡遊が六月十二日東京の外新設球場で行われた。

天主様の御教理の、聖書と聖父様に包かれた聖職とザヴェリオの十字架の象徴の後、聖歌「大いなる司祭を見よ」の合唱の起る中を、巡礼団一行及多数の聖職者に包まれて、黒衣な長い杖をつけた教皇特使ギルロイ枢機卿が久場、直ちにミサが開始された。僕達は祭壇左側の後面である聖王座でミサにあつた。

聖書の巻読、ギルロイ枢機卿の聖フランシスコ・ザヴェリオを讃える御説教……と式は進み、聖体拝受は祝詞唱前の芝生で十二名の司祭によつて五千の信者に与えられ、僕達の学校からも約十名が拜領した。ミサが終ると教皇聖下からの祝詞と全職官が参集の全信者に与えられ感謝

の祈りの後、第二部に移り、土井車末大司教の祝詞の終り、吉田外宿の祝詞代読で式を閉じ、

四時半、ギルロイ枢機卿一行の退場の刹那、四方の観音廟から人々がどつどつと集り一行の通り路を固んで見送れば、枢機卿は人々に何處も十字架を押し祝福を与えながら退場され、最後には聖職と美と白の地に教皇の冠りと天國の鐘が奏わされてゐるヴァカカン帝國旗が退場した。

僕達はそれからすぐに上智大学に向い、十五日前校長先生とシュトルテ先生が初めて日本語を習われたこの大聖堂の後庭で少し休憩、のちこへで奇跡の石版を一人々々拜読させていざだき、聖イグナチオ教会を視物した。(四月号参照)

僕達はこの教会の前で記念写真を撮り、聖フランシスコ・ザヴェリオの夫いた蓮子がよく成長し、よく果



り、且つ懐ける事と心に念じながら帰途についた。

### 聖腕榮光へ

(36) (一頁) (一頁)

去る六月十八日の夜、待望の聖フランシスコの石手が本校に到着、修練院(本館)の小聖堂に安置された。その夜は神父様と神學生さんたちが一晩中かわるがわる聖堂を囲まされた。五月九日の朝は本校の生徒をはじめほとんども聖堂が一ぱいになるほどの多くの人々が集って来た。八時二十分「荒き波風」のおごごかな合奏とともに聖腕はヘルヴェック神父様に奉持されつゝ、大聖堂にうつされ、祭壇の左側に安置された後、儀典ミサが行われた。この日の説教はシュトルテ神父様が主要次のように述べられた。即ち「我々が今日ここに集つて来たのは、死んで死んで人の石手を見るためではない。肉と骨をおがみに来たためでも勿論ない。此の石手を産して此の手を四百年前に自分の体の一部としてお使いになつた聖腕の偉大なる精神をほめ讃えるためである。今日此の聖腕を我々が榮光に持つて来て戴いたことは、我々にとつて大きな喜びである。この事は聖腕が今でも我々と共に居り、我々をお導きになつていらつしやる證據である。

又今日は聖腕の白である。此の石手は教皇様の特別の御好意によりローマから日本に送られ、我々に再び聖腕の日本に対する愛を思い出すせるものである。聖腕はこの石手を以つて最初の公教訓理を導かれた。此の石手

こそ聖腕の最も大切な道具であつた。

又今日は懐いの日である。我々は聖腕と同じ信仰を待ち、又同じ天主様の愛をうけて居る。我々は聖腕と同じように天國の喜ぶを得るように聖腕に御取次を願ひませう。我々は信仰があるから救われると思つては大きな間違いなのだ。信仰を守り、そのつとめを果すと、きつめて救われるのです。我々の信仰の祖先は聖腕だと云つて安心してはいけません。ユダはイエス様の十二使徒の一人であつたのに、聖腕の誘惑にまけてしまつた。聖腕の日本に於ける最初の信者は後に海賊となつて悪の道へ転落した。聖腕も聖腕に、再びその祝福の手をのびして我等を祝福し、信仰を養ふまでもより通すことのできるように願ひませう。ミサの後、聖ザヴエリオに対する祈りがあつた。これがすむと一人一人順次に聖腕拝観があつた。これによつて式が終り、その日の午前十一時、聖腕はヘルヴェック神父様に奉持されて自動車でヨゼフ病院に向つた。

又今日は聖腕の白である。此の石手は教皇様の特別の御好意によりローマから日本に送られ、我々に再び聖腕の日本に対する愛を思い出すせるものである。聖腕はこの石手を以つて最初の公教訓理を導かれた。此の石手

### 聖人のおもかけ

(37) (一頁)

六月廿三日水曜日には、聖君院ドイッ語教授、キリシタン文化研究家の師谷教授がいらつしやう。そして三時同様に下の広場に全校教師、生徒が集つてお話をうかがつた。休み時間には

キングロウとか何とか云つてうわさしていきなげに、言の好守は、先主がどんまなちかと云うことにもつぱら向けられて、会場へ入つていらつしやるまで、首を長くして待つていた。ヘルヴェック先生の御案内で、遺へ立られると、言ひしんとつた。ま、手低い声で「詰がむすかしくなるかも知れないからそのつとめを」と前置してから詰しはじめられた。

「今年、聖フランシスコ、ザヴエリオの渡日以來四百年になります。彼は遠くバスカに生れて、パリ大学に學び、優秀な學生として前途を有望視され、彼自身も大学の教授になつて居つていました。時に同大学にイブナチオ、ロヨラと云う方が居つて、聖腕に將來について向いかけ、又彼に「人全世界をもうくとも、もしその魂を失つた向の益があらん」と云う聖言について語られたので、遂に聖腕も動かされて、神の道に入らうと思ひ、イエズス会最初の會員として一五三四年八月十五日に宣願を立て、後に布教を以て東洋へ來たのです。そしてマラツカで日本人アンジローと会い、日本に來ようと思ひ、一五四九年八月十五日、聖田マリヤ親昇の日の祝日に日本に約二年に亘つてゴアに歸り、さらに布教の目的に行つた。東部の神の上川原に於て、一五五二年十二月三日になくなつたのです。彼が日本に來たことは、二つの意味があります。一つは宗教的意味で、この日本に始めてキリスト教が伝わり、多くの人の救済の始めとなつた

のです。二は文化的意味です。文化とは國威をまろしてアロハ、シヤツをきまひするのと区別します。これによつて日本は初めて、西洋の本當の文化に接することが出来たのです。このように聖人の渡日は非常に意味の深いことですからよく考えなくてはなりません。次にこの向の長崎における式典のものをいろいろと語されて、一時間におわるお話しは終つた。校長先生の感謝によると、教授は、校長先生の感謝によるのだ。きつと校長先生もこの先生にほめられたのだからと、おかしなつた。五時間目に教授は、授業を參觀された。榮光の生徒は、このようなお話しを聞くことも出来ず、非常に幸福である。

### 榮光の教父

(38) (一頁)

去る六月五日の聖受胎節の大祝日に、本校第一回の公教費理のコンテスタが行われた。コンテスタは、ABCの四つの部門に分けて行われた。各コンテスタの範囲は4コンテスタは、公教費理向1100迄、Bコンテスタは向1100迄、Cコンテスタは向1100迄、Dコンテスタは向1100迄の中のを附し、向と同様に、Dコンテスタは向1100迄であつた。前日教士はほめられた。前日、わらわ、出場選手四十五名の奮斗は、観衆を満足させた。コンテスタは、BADCの順で行われた。シュトルテ先生、ヘルヴェック先生が出席者で、解答は約八十名正解ならばよし、以下はだめときめられた。十一

時から二時間半にわたり、選手の間、對戦の結果次の十名が優勝、Aコンテスタ1125、Bコンテスタ1130、Cコンテスタ1135、Dコンテスタ1140。以上の十名に、十字架が、ほめとして、授与された。天主の光榮である十字架は、まに傳明者の光榮のしるしでもある。

### 創立記念日

(39) (一頁)

本校の創立記念日は、例年通り六月廿一日聖アロイシオの祝日に行なわれる筈であつたが、講堂未完成の爲に、六月廿七日が只の休みになつた。記念日の學差合は、この日に講堂完成後、即ち二年朝の始めのころになる予定である。

### 生徒の悲鳴

(40) (一頁)

或る一年生が「偉大な地面に線を引いてピンポンをやるつていと二年生が来て、こゝはすつと前から横道がワンパンベイスに使つていた土地だ、というわけです。二年生は少し一年生をちやままして居るようだ。